

主 題：霊的リーダーのあるべき姿：監督とその資格③

聖書箇所：テモテへの手紙第一 3章2節

テーマ：聖書の教えている霊的リーダーとはどのような存在か

今朝、皆さんと続けて見ていきたいみことばはIテモテ3章です。私たちはここ数週間にわたってパウロの記したこの手紙から霊的リーダーのあるべき姿について、特に教会を監督する者に関して考えてきました。きょうの内容に入って行く前に、先週までに学んだことを少し思い返してみてください。1節で、人が教会の監督として、神と人ともに仕えたいと願うことはすばらしい仕事を求めることであると述べたパウロは、続く2節からその人物が満たしていなければならない資格について教えていました。パウロはたとえ犠牲を払ってでも教会のリーダーとして喜んで働いていきたい、もしそんな強い願いが心のうちに与えられているのであれば、それはすばらしいことです、立派な願いですと言っていました。でも、ただ願いさえ持っていれば、リーダーになれるわけではありません。その願いを持ちながら、自分の歩みがみことばの基準にふさわしいものかどうかをよく吟味しなさいと。パウロは主に喜ばれるものとして教会が成長していく上で、みことばの基準を満たしたリーダーがどれほど重要なものをよくわかっていました。だからこそ願いを持ってさえいれば、だれでもその働きにつけますということも言いませんでしたし、またその人物がこんな才能や学歴、社会的な地位を持っていなければいけませんということも教えてはいませんでした。その代わりに、教会を監督する者が満たしていなければならない霊的な基準、15個の資格をここで具体的に挙げてくれていました。

私たちはこれまでに三つの資格を見ました。一つ目に見たのは、監督は「非難されるところ」のない者でなくてはならないということでした。監督となろうとする者であれば、その人の歩みのうちに周りの者から責められるような明らかな罪や問題がないことが求められていたのです。これはいっさい罪を犯さないということではありません。監督になるためには、罪を犯さない完璧な人でなくてはなりませんと教えられていたのでもありません。リーダーも例外なく罪は犯します。でもたとえ罪を犯したとしても、すぐにその罪を告白し、悔い改めてみことばによって成長しようと取り組んでいくからこそ、周りの者が指差して非難できるようなところを見出すことができないのです。監督は群れの模範になる存在だからこそ、すべての面において「非難されるところ」のない者であることが求められていました。

また二つ目に見たのは、「ひとりの妻の夫」であるということでした。監督は自分の妻を心から愛し、夫婦関係や性的なことに関しても聖さを保つ者であることが求められていたのです。これは監督になるためには必ず結婚していなければいけませんという話ではありませんでした。独身の男性でも監督として仕えることはできます。でも結婚しているのであれば、その妻に自分自身のすべてを、からだだけでなく願いや考え、心の隅々に至るまでそのすべてを捧げて愛を示していくことが大切なのだと教えられていたのです。監督は「ひとりの妻の夫」であるという点においてもだれからも「非難されるところ」のない者であることが求められていました。

そして三つ目に見たのは、「自分を制」するということでした。監督は自分の欲求や感情に振り回されるような者ではなく、思慮深く自分を制御できる者でなくてはならないと教えられていたのです。ノーと言って断るべき時に、はっきりとノーと言える人物であることが求められていました。監督は「自分を制」することにおいても「非難されるところ」のない、霊的に安定した者であることが求められていたのです。

こうしてみことばは教会を導いていくリーダーがどんな資格を満たしていなければならないのかをはっきりと教えてくれていました。しかし、これらの基準は何も霊的リーダーにだけ特別に与えられたも

のではありませんでした。私は今リーダーでもないし、この先リーダーにならないから、自分とは関係ない話ですというものではなかったのです。なぜかという、それはこれらの基準こそが霊的成熟を目指すすべての人に当てはまること、もっと言えば私たちひとりひとりが今まさに目指していなければならない目標だったからです。私たちはみな「非難されるところ」のない者として歩いていくことが求められていました。そのために自分自身に問いかけることが必要だったのです。自分のうちにだれかに指摘されたら困るような罪はないだろうか、それが罪だと自分ではわかっていながらも、悔い改めることもせず隠しているようなものがないだろうか。そしてもしそのような責められる部分があるのだとすれば、主の前にその罪を告白し悔い改めて歩み続けていくことが大切でした。

また私たちはみな「非難されるところ」のない者であるだけでなく、「ひとりの妻の夫」として歩いていくことが求められていました。夫だけでなく妻もそうです。ひとりの夫の妻として歩いていくことが求められていました。夫はその妻を、妻はその夫をキリストが犠牲を払って愛されたように心から愛しているのかどうか問われていました。また何もこれは結婚している者だけの話ではなく、独身の者も同じでした。独身の者も性的な聖さを保っていくことが必要だったのです。

そして「非難されるところ」のない者と「ひとりの妻の夫」であること、それと同じように私たちはみな「自分を制」する者としても歩いていくことが求められていました。自分の感情や欲求に心を支配させるのではなく、みことばによって心を守り、御霊に満たされて歩む者へと変えられ続けていくことが求められていたのです。

こうして私たちは三つの資格を見てきました。今、私たちはそのような歩みをしているでしょうか？ きょうはこれから新たに二つの資格を2節から学んでいきます。皆さんの中に、一体いつまで2節にとどまっているのかと思っておられる方もあるかもしれませんが、この一つ一つの資格が教会の監督にとって、また私たちひとりひとりにとってとても大切なものだからこそ是非一つ一つのことと自分の歩みを照らし合わせてみて、神様の前にどのような者として自分が歩んでいるのか、よく考えてみてください。自分がどんな点において成長していかなければいけないのか、どんな点において成長できるのかをよく考えてみてください。

○監督とその資格④：慎み深い 2 d 節

では、そのことを踏まえた上で、実際にきょうの内容をみことばから見ていきましょう。いつものように、まずみことばをお読みしますので、いま一度1-7節を見てください。

I テモテ3：1-7

「：1「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである」ということばは真実です。：2 ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、：3 酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わず、金銭に無欲で、：4 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。：5 ——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう——：6 また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。：7 また、教会外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。」

1. 定義

さて、監督の15個の資格として、パウロが四つ目に記していたものは「慎み深く」あることでした。「非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く」と書かれていました。要するに教会を監督する者は「慎み深」さにおいても周りの者から「非難されるところ」のない人物であることが求められていたのです。

ではまず、この「**慎み深**」いということばはそもそも何を意味しているのでしょうか？このことばはもと「健全な」とか「正しい」ということばと「**考え**」ということばの二つが組み合わさってできています。そして、ここから「**考え**において健全であること」、「**分別がある**」とか「**思慮深い**」といった意味で用いられたりするのです。マスターズ神学校の教授でもあったロバート・トーマス師はこのことばを「（**慎み深い**とは……）健全な心の落ち着きから生じる、正しい、自制心のある論理的思考。」と表現していました。ここでのポイントは、「**慎み深**」い者というのは物事を考えることにおいて賢明な判断を下せる人物だということです。この人物は、自分自身の考えを制することができるのです。言いかえると、周りのいろいろなものに流されたり、気の向くまま物事に判断を下すことがありません。状況や人によって左右されたり、感情に支配されたりするのではなくて、いつも心の平静を保って、その場にふさわしい選択を下すことができるということです。もっと言えば、置かれた状況において主に喜ばれることが何かを正しく考え、みことばから判断することができる人物こそ「**慎み深**」い者だということです。

もしかしたら、ここでこんなふうに感じられた方もいるかもしれません。ではこのことばは、先週見た「**自分を制**」することとどこに違いがあるのだろうか。確かにどちらも「**自分を制**」すること、自制という概念が含まれたことばです。だからこそ非常に似たようなことばで訳されていたり、このテモテの箇所と同じように、二つのことばが並んで用いられることもあります。例えばペテロも I ペテロ 4:7 で二つのことばを並べて、「**万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。**」と語っていました。ここで出てきている「**心を整え**」という初めのことばが「**慎み深**」いと同じことば、「**身を慎みなさい**」という後ろのことばが「**自分を制**」すると同じことばです。この箇所を見てもよくわかりますけれども、この二つのことばは非常に似通っています。共通している部分も多々あるのです。でも二つのことばの意味は全く同じではありません。その違いを簡潔に言うと、「**自分を制**」するというのが**自分自身の肉の欲や願いを制**することを強調していることに対して、「**慎み深**」いというのは**自分自身の考えや思考を制**することを強調しているということです。どちらも同じように自制を表しています。違いは、特に何を強調しているかです。ここで言われている「**慎み深**」いというのは健全な考えで、聖書に基づいた知恵のある判断を下すことができることを強調していました。監督はそのような「**慎み深**」い者でなくてははいけませんと。パウロは教会を監督する者たちが満たしていなければならない条件としてこれを挙げていたのです。監督は自分の欲や願い、感情といったものに振り回されることなく自分を慎重に制することができることも必要だし、また同時に、どんな状況にあっても落ち着いて自分を律して主に喜ばれる賢明な判断を下せる者でなくてははいけませんと。

2. 重要性

パウロは、教会のリーダーにとってそのような資格を持っていること、そのような歩みをしていることが絶対に必要なのだということをよくわかっていました。それはパウロが教会のリーダーたちが直面するであろう問題をだれよりもよく理解していたからです。この手紙が弟子のテモテに宛てて記された大きな目的の一つは、エペソの町に残されたテモテが教会の中に入り込んできていた偽りの教師たち、みことばとは違った教えをするリーダーたちを黙らせることでした。そのことが I テモテ 1:3-4 に「私がマケドニアに出發するとき、あなたにお願いしたように、あなたは、エペソにずっととどまっていて、ある人たちが違った教えを説いたり、果てしのない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。」と記されていました。リーダーとなる者はテモテと同じように、群れの羊を守るためにみことばを正しく教え、間違っただリーダーたちと向き合っていく必要がありました。

でも想像してみてください。間違っただ教えをしている人たちに対して、黙っていなさいと言うことは簡単なことではなかったのです。なぜならパウロはそういった者たちの状態のことをもう少し詳しく 6:3-5 で教えてくれています。「**違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔**

にかなう教えとに同意しない人がいるなら、その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病氣にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、また、知性が腐ってしまって真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。」と。リーダーはこのような人たちと向き合わなければいけなかったのです。高慢で、みことばに耳を傾けようともせず、人々をねたんだり、そしったりして、絶えず争いを引き起こし、神様よりも金銭を愛するような者たちです。素直に話を聞いてくれるような者ではありません。自分と相反する考えを持っている者たちに対して、あなたたちの教えていることは間違っているから黙っていなさい、そのことをやめなさいと命じる必要があったのです。もしそんな時に、教会の監督が「自分を制」することができなかつたとすれば、間違いなくいろいろな問題が生じます。監督が自分の感情を制御することができなければ、彼らと同じように言い争ってしまうこともあります。そして彼らと同じように言い争ってしまえば、教会はますます混乱し、争いが絶えず起こってしまうようなものになってしまいます。

また、監督が自分は傷つきたくないと思って、みことばよりも自分の身を守ることを優先したり、神様よりも人を恐れてしまえば、教会が建つべき土台というものを失ってしまいます。またみことばに堅く根差すことよりも、彼らの影響を受けて意見がころころ変わるような不安定な監督だとすれば、群れのひとりひとりが抱えている問題に対しても、聖書に基づいた知恵のある判断を下すことができず、いろいろな問題が生じるのです。だからこそパウロは教会を牧する者が「慎み深」さという点においても「非難されるところ」のない者であることを求めていました。霊的なリーダーはどんな状況にあっても、落ち着いて自分を律し、何に惑わされることもなく、みことばから主に喜ばれる賢明な判断を下せる人物でなくてはならないと、パウロは訴えていたのです。

3. 適応

監督にとって「慎み深」ということは非常に重要なものでした。でも、この資格もこれまでと同じで、単に霊的リーダーにのみ課されたものではありませんでした。みことばはすべてのクリスチャンにとって、この「慎み深」さが大切なものであると繰り返し教えていたのです。例えばローマ12:3でパウロは「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってははいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。」と命じていました。また、テトス2:11-13を見ても、「というのは、すべての人を救う神の恵みが現れ、私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れを待ち望むようにと教えさとしたからです。」と記されていました。パウロはここでも、神様の恵みによって救われた者たちすべてがその救いにふさわしく、「慎み深」い敬虔な生活をしていくことを求めていたのです。私たちがこうしてみことばを見た時に、確かに監督はそのようなものを満たしていなければいけませんけれども、この基準はリーダーだけのものではありませんでした。私たちはみんな状況や人に左右されたり、感情に支配されたりするのではなくて、いつも落ち着いてみことばから正しい判断をすることができる人物へと成長していくことが必要なのです。私たちひとりひとりがそのような者として成長していくことを神様は求めていました。

今私たちは果たしてそのような歩みをしているのでしょうか？ 私たちの今日の歩みは、周りの人がその歩みを見た時にあなたのことを「慎み深」い者だと見るような歩みでしょうか？ 例えば生活をしていれば物事を判断したり、物事を決断するような場面に直面します。そのような時に、私たちは普段からみことばに基づいた知恵のある選択ができているのでしょうか？ 皆さんが置かれた状況の中にあつて、何をすれば主が喜ばれるのかということをもっと先に考える者として生きているのでしょうか？ それとも置かれた状況の中にあつて、特に状況が厳しくなれば冷静さを失って自分の感情やその場の状況に流されてし

まったくそのような歩みでしょうか？正しいことをいつも正しいと判断できる者でしょうか？みことばの真理に立って物事を判断するでしょうか？それとも真理から離れて行動を決めるでしょうか？

また、私たちはどんなものに思いをめぐらせるのかということについても自分自身を正しく制することができるのでしょうか？言いかえると、私たちが考えるべきでない、心をとめるべきでないような罪や誘惑がやって来た時に、はっきりとそれらに対してノーと言えるでしょうか？それともそのようなものに対して毎回抵抗することもなく、いつもそれらに振り回されているような歩みでしょうか？それがどんなに些細なものであったとしても、神様を悲しませるようなことに対して私たちはノーと言える者でしょうか？私たちの思いや心は一体どんなものに支配されてしまいやすいでしょうか？どんなものに対して私たちはノーと言うことに難しさを覚えてしまうのでしょうか？ある人にとっては怒りや憤りかもしれません。自分が不当な扱いを受けたり、思いどおりにならないようなことがあれば、すぐに怒りや人を許せないという思いが心を支配し始めてしまうのです。またある人にとって、それは性的な罪、性的な誘惑かもしれません。聖さを保つことよりも、いろいろな場所で自分の目に入ってくる誘惑に心をとめて、そしてそれらが心を支配し始めたりするのです。またある人にとっては、それは恐れや不安かもしれません。もし自分の家族に、自分の仕事に、自分の将来にこんなことが起こったらどうしよう、今置かれている状況に変化が見られなかったらどうしよう、そういった不安な思いが心を支配し始めたりするのです。

私たちがよく知っていることは、どれも最初は些細なものだということです。それらは最初は一見何の問題もないようなものに思えるかもしれません。でもそういった間違っただけの思いや罪の誘惑に対して私たちがノーと言わなければ、次第にそれが私たちの心で大きくなり、思いや考えを支配し、キリストにある私たちの喜びを奪っていくのです。だからこそ私たちはどんな小さな罪であったとしてもノーと言うことが非常に大切になります。そうして私たちは自分の思いや心を守っていく必要があるのです。そういった者として私たちは歩んでいるのでしょうか？心をとめるべきでないものが、神様を悲しませるような思いや罪がやって来た時に、すぐにノーと言って自分を制することができるのでしょうか？

最後に考えてみてください。そういった罪に対して勝利するだけでなく、私たちがどんな時もみことばから正しい判断を下していこうとするのであれば、それは自分たちの知恵や力では絶対にできません。私たちは聖霊なる神様の助けを祈り求めながら、何よりもみことばで心を満たしている必要があるのです。みことばで心を満たしていなければ、私たちはみことばによって判断することはできません。詩篇 119 : 9、11 節、また 15 - 16 節の中でも「どのようにして若い人は自分の道をきよく保てるでしょうか。あなたのことばに従ってそれを守ることです。……あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。……私は、あなたの戒めに思いを潜め、あなたの道に私の目を留めます。私は、あなたのおきてを喜びとし、あなたのことばを忘れません。」と繰り返し教えられていました。私たちがみことばを忘れた時に、私たちの目は別のものを向いてしまいます。私たちの目がキリストに目を向けているかどうか問われているのです。私たちの心はみことばによって満たされているのでしょうか？私たちはみことばを学び、学んだ真理を愛して、いつもそれに基づいていくことを何よりも自分の楽しみとしているのでしょうか？そこに満足を見出しているのでしょうか？自分の思いを優先するのではなく、すべての面においてキリストの思いに自分自身を服従させることが求められているのです。そのような者として私たちは歩んでいるのでしょうか？

そして、これが四つ目にパウロが挙げた監督の資格、「**慎み深く**」あることでした。教会のリーダーはいつも落ち着いてみことばから賢明な判断を下すことが求められていたのです。そして私たちひとりひとりにもこのことは求められていました。

○監督とその資格⑤：品位がある 20 節

次に、監督の15個の資格として五つ目にパウロが記していたもの、それは「品位」があることでした。要するに教会を監督する者は「品位」があることにおいても、周りの者から「非難されるところ」のない人物であることが求められていたのです。

1. 定義

ではまず、この「品位」があるということばはどんな意味を持っているのでしょうか？ここで「品位」があると訳されていることばは非常におもしろいもので、元々のギリシャ語には“コスミオス”ということばが使われています。この“コスミオス”ということばを聞いて、何か想像できるものがありますか？実はこのことばは“コスメチック”、略すと「コスメ」ということばの語源になります。「コスメ」と聞くと、女性の皆さんはよくわかると思います。簡潔に言えば、これは化粧品などを指すことばです。では、女性の皆さんが「コスメ」を使って化粧をする目的は何でしょう？それは容姿を整えるためです。私も「コスメ」の意味が余りわからなかったので、ネットの記事をいろいろと見てみました。そこに、女性はまず土台となるファンデーションをし、次にフェイスパウダーを塗り、コンシーラーやアイライナーを使い……と書かれていました。こういったさまざまなものを用いて女性は美しく自分の身を整えようとするのです。パウロがここで監督は「品位」がある者でなくてはならないと言ったこともそういう意味だということなのです。

監督は“コスミオス”、その生き方が混沌としたものではなく、しっかりと整えられた、秩序立ったものでなくてはならないということなのです。もっと言えば、その人のやることなすことそのすべてが、いつもきちんとしていて規則正しく整った美しいものであるということなのです。それが「品位」ある者として生きていくということなのです。だからこそそういった生き方を見た人が思うのです、この人の生き方は誠実できちんとしていてすばらしい、自分もこの人のように歩んでいきたいと。そうやって周りの人から尊敬を払われるような、称賛されるような歩みこそが「品位」ある者の歩みになるのです。

もちろん皆さんに勘違いしてほしくないのは、パウロはここで単に外側だけを正しくふるまって、称賛されるような者であれば、内側は乱れていてもよいという話をしていなかったということなのです。聖書を見れば、人前でだけ仮面をかぶってふるまうような偽善者をよしとはしていません。イエス様もこのように言われていました。マタイ23:27-28のところに「わざわざい。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいです。そのように、おまえたちも外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。」と。ですからここで言われていたことは、その人の外面だけを取り繕えば大丈夫だということではありませんでした。そうではなくて、外側も内側も、そのどちらにおいても周りの者から尊敬されるような、きちんとして整ったものであること、それこそが「品位」ある者だということでした。

2. 重要性

ここで少しこれまでの文脈を考えてみてください。これまで特に三つ目と四つ目の資格で、監督というのは自分自身の欲や感情、周りの状況や人といったいろいろなものに振り回されたりすることなく、正しく自分を制御することができる者でなくてはならないということを見ました。つまり自分自身の思いや行動を生み出すその心の部分も、みことばによって正しく制することができる者が監督の資格として求められていたのですが、そうやって自分を制して、いつもみことばの真理によって心を支配させているような人物というのは、その人の歩みやふるまいにどんな影響が及ぼされると思います？その人の心のうちがいつもみことばに満たされているのであれば、その人のふるまいはどんなものになるでしょう？例えばその人の心がいつもキリストの愛で支配されていれば、どんな愛を周りの人に喜んで示そうとするでしょう？もしその人の心がキリストの赦しで支配されているのであれば、周りの人に対してどんなふうにかしを実践しようとするでしょう？愛だけでもありません。赦しだけでもありません。例えばキリストの忍耐ならどうでしょう？キリストのあわれみやキリストの優しさならどうでしょう？そ

のようなものでいつも心を支配させている人だとすれば、その人はどういったふるまいをするでしょう？また例えば神様の義や聖さで支配させていれば、その人は罪に対してどんなふうふるまうでしょう？そのようなもので心を支配させていれば、その人から出てくるふるまいというものはおのずと主に喜ばれるものになり、それを見た周りの者からも称賛される者になる。また、そういうふうにもみことばの真理によって心を支配させていれば、その人の歩みは家庭においても、職場であろうとも、教会であろうとも、どこにいようとも、だれといようとも、何をしようとも変わることがないのです。なぜか——。それは決して変わることのないみことばによって、その心が満たされているからです。

ですから、「品位」ある者として歩んでいこうとするのであれば、「自分を制し、慎み深く」あるということも絶対に欠かすことはできません。監督は自分の心を御霊やみことばによって支配させ、それによってきちんと整えられ、人々の信頼を勝ち取るような歩みをする事ができるのです。心にあるものが外側に出てきます。問われているのは、心が何のとりこになっているかということです。パウロは「品位」ある者であることを教会の監督の資格として挙げていました。それが絶対に必要なのだと。ウィリアム・パークレー師もリーダーの責任として、こんなことばを残しています。「指導者は、その心の中にキリストの力が君臨し、その生涯にキリストの美が輝いている人でなければならない。」と。

「品位」あるということ、それが監督にとって非常に大切なものになるのです。それは考えてみればよくわかります。霊的リーダーは、人々にみことばを教え、福音を語っていくという大切な責任を負っています。でももしそんなリーダーの語っていることと行っていることが異なっていれば、そのリーダー自身が偽善者だとそう責められるだけではなく、何よりも語っているそのメッセージ自体が軽く扱われてしまうことにつながるのです。

また霊的リーダーは群れの模範として教会を導いていくという責任も負っているのですけれども、もし模範となるべきリーダーの歩みのうちにキリストの姿が見られなかったとすれば、だれひとりとしてそのような歩みを模範としてついていくことができません。それ以上に、リーダーの生き方がキリストから離れて、いろいろなところに矛盾を生じるようなものであれば、そのような歩みに対して魅力を感じることも、尊敬を抱くことも難しくなってくるのです。だからこそパウロは霊的リーダーである者に対して、そのような「品位」あることを求めていました。

パウロは霊的リーダーであるテモテに対しても同じように命じています。Ⅰテモテ4:12に「年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。かえって、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。」と。パウロがここで言わんとしたことは明白でした。確かにテモテは大きな責任を追っていました。エペソの教会の中であって、偽りの教えをしている者たちを黙らせ、混乱している兄弟姉妹たちをみことばから教え励ますという責任を負っていたのです。でもその時に大切なことは、ただ口だけの者になるのではなくて、「ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも」模範となることでした。パウロは口だけの者になってはいけません、模範を示して、模範によって導いていきなさいと、テモテにも教えていたのです。そしてこれは教会の長老たちにとって非常に大切な責任になります。今こうやって私自身もメッセージしていますが、このⅠテモテ4:12は私自身にいつも言い聞かせているみことばの一つです。この箇所を見れば見るほど、私自身も成長しなければならないことが多々あることによく気づかされました。でも同時に、そういったものを見ながら神の教会を監督する責任を与えられている者として、ほかの長老たちとともに成長していきたいという強い思いもますます与えられました。ですから皆さんにお願いしたいことは、ぜひそれぞれの長老たちが「慎み深く、品位」ある者として歩み続けているのかということをよく吟味してみてください。もし私たちがこのような基準を満たしていなければ、私たちはこの職からおりがする必要があります。そしてまた祈りによって、このように歩み続けていくことができるようにと励ましてください。

3. 適応

これまでと同じように、この資格も霊的リーダーにのみ課されていたものではありませんでした。皆さんひとりひとりにも言えることです。みことばはすべてのクリスチャンがこの「品位」ある生き方をしていることが重要なのだと繰り返し教えていました。例えばⅠペテロ3：1－4に「同じように、妻たちよ。自分の夫に服従しなさい。たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって、神のものとされるようになるためです。それは、あなたがたの、神を恐れかしこむ清い生き方を彼らが見るからです。あなたがたは、髪を編んだり、金の飾りをつけたり、着物を着飾るような外面的なものでなく、むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人がらを飾りにしなさい。これこそ、神の御前に価値あるものです。」と記されています。ペテロはみことばに反抗的な未信者の夫と結婚した妻が取るべきふるまいをここで教えていました。たとえ神様に逆らって歩むそんな夫に対しても「無言のふるまいによって……柔和で穏やかな霊」を飾りとしてへりくだって従っていきなさいと言うのです。そうすれば妻の「神を恐れかしこむ清い生き方」を目の当たりにした夫が、それによって救いへと導かれることがあるということでした。

神様はそういったひとりひとりの信仰の歩みを用いて人の心を砕き、真理へと導くこともあるのです。ですからこの中に未信者の夫を持っておられる方があれば、これは皆さんにとってすばらしい希望の約束です。でも、そのために大切なことが書かれていました。それは夫の前で皆さんがあかしているものがどのようなものかということです。夫の前で皆さんが見せるその歩みが何に一番関心を置いているかということが問われていたのです。ここでペテロは別に妻は髪を整えたり、素敵な服を着てはいけなさいと言っていたわけではありません。ここで問われていたことは、そのような外面的なものに心がいつも囚われているのか、それとも神様の前に価値ある柔和さや穏やかさといった内面的なものを求めているかということです。大切なのは、その生き方がキリストのすばらしさをあかす、「品位」のあるものかどうかでした。

また同じⅠペテロ2：12でこうも記されています。「異邦人の中にあつて、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行いを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。」と。ここで問われていたことも明白です。みことばは信仰者がどのようなあかしを人々の前で立てているのか、もっと言えば周りの者が尊敬するような「品位」ある者として歩んでいるのかどうかを問うていました。私たちひとりひとりそのことが問われていたのです。だとすれば皆さん、果たして今私たちはそのような歩みをしているのでしょうか？私たちの歩みを見た人は、私たちを指して、この人は「品位」がある人だと私たちを扱うのでしょうか？それともそうではないのでしょうか？考えてみてください。私たちは口で語っていることと行いとがかけ離れた者になっていないのでしょうか？私たちがみことばで信じていることと、そのふるまいが異なったものになっていないのでしょうか？家庭にあつて、職場にあつて、いろいろなところにあつて、また妻や子どもに対して、同僚に対して、友人に対して、皆さんが見せるあかしはいつも変わらないものなのでしょうか？私たちの歩みは、どんな時もキリストのすばらしさがはっきりと見て取れるようなものなのでしょうか？その歩みを目にした人たちが尊敬するような秩序立った生き方をしているのでしょうか？

これは何も私たち自身が尊敬されたいという思いを持つとか、尊敬されたことを自分たちが誇るためではありません。私たちが誇りとするものはただキリストだけです。だからこそ、その誇りとする私たちの愛する主を人々が軽く見たり、けなすような歩みを私たちがしてはいけません。どうでしょうか？人々が私たちの歩みを見た時に、あなたの生き方は私のものとは全然違います、なぜそんなに違うのですかと。あなたのうちにあるその希望について私に教えてください、そう求められるような歩みをしているのでしょうか？それともまるで主を知らない人と同じような、何も変わらない生き方をしているのでしょうか？

○まとめ

パウロが五つ目に挙げていた資格は「品位」があることでした。教会のリーダーはその生き方が混沌としたものではなく、しっかりと整えられた秩序立ったものであることが求められていました。そして私たちひとりひとりにも同じことが言われていました。さて、きょう私たちは監督の資格の四つ目と五つ目をともに考えてきました。改めてどうだったでしょう？パウロは霊的なリーダーが「慎み深」い者であることを求めていました。監督は状況や人に左右されたり、感情に支配されたりするのではなく、いつも心を制し、みことばから正しく判断することができる人物であることが大切でした。またパウロは霊的なリーダーが「品位」ある者であることも求めていました。監督は自分の心のみことばや御霊によって支配させ、それによってきちんと整えられた、人々の信頼を勝ち取るような歩みをしていくことも大切でした。これらが教会を導いていくという責任を負っているリーダーが満たしていかなければならない基準だったのです。でもこれらの基準はただリーダーにだけ与えられていたものでもありませんでした。みことばは私たちひとりひとりが目指していく目標として、霊的に成熟した者として、これらの姿を教えてくれていたのです。私たちひとりひとり日々の生活の中であって、目指していくべき目標の姿がここに記されているのです。

だとすれば、私たちはそのような者になりたいという強い思いを持って、今を歩んでいるでしょうか？このような資格を見た時にある人は難しい、自分にはできないと感じてしまうかもしれません。でもそのような時は覚えることです。聖書はここで自分の知恵や力、完全な自分の意思によって、聖書の求めているこの「慎み深」い者、「品位」ある者となっていきなさいと教えてはいませんでした。もしそうだとすれば、そこには私たち絶望しかありません。もし私たちが自分たちの力でこのようなものを担っていかなければいけないとすれば、だれひとりとしてすることができません。そんな力は私たちのうちにはないのです。でもみことばを見た時に教えられていることは、私たちがみことばで心を満たし、御霊に満たされて歩んでいくのであれば、聖霊なる神様が救われた者のうちに働いて、私たちをこのような者へと変えてくださるということでした。罪に死んでいた私たちを生まれ変わらせてくださったその力でもって私たちを変えていってくださいのです。皆さん、この力を軽んじてはいけません。あの罪と罪過の中に死に、よいことをしようなどと考えず、神を見ようともせず、逆らっていた私たちを、主を愛し、主のために生きていきたいと望む者へと神様は変えてくださったのです。その願いを与えてくださった、そのように変えてくださった神様が私たちのうちに続けて働いてくださって、私たちのうちにこのような御霊の実を生み出してください。そのような約束が与えられているのだとすれば、そのような力が私たちに与えられているのだとすれば、私たちの責任は、この方の力を祈り求めながら歩んでいくことです。私たちはこれからも罪との闘いを経験し、それに負けてしまうこともあります。でもそのたびに罪を悔い改めて、ますます主に喜ばれる者になりたいと歩んでいくのです。

今まで話を聞いてきて、全く何のことかわからないという方がおられるのであれば、イエス・キリストのために生きていきたいという思いが心の中にないのであれば、その人はこの資格を見る前に、まず自分自身の信仰をよく考えてみてください。またイエス・キリストを自分の救い主として、主として知らないのであれば、まずこのすばらしいキリストを、この救い主を自分のこととして知ってください。この方はひとりひとりの罪のために十字架にかかって死に、3日目によみがえって罪と死に勝利されたお方です。私たちの罪を赦してくださったお方です。この方のすばらしさをまず自分のこととして知ってください。そのことを知っている皆さん、その思い、その福音で心を満たしながら神様に頼りつつ、このような基準を目指して、このような霊的に成熟した者の姿を目指して今週も一日一日歩んでいきましょう。